

特集にあたって

月例の学習会に参加している会員から、遠山先生の著作集が完結したのを期して何かしないかという声が上がったのは一九九二年の暮れであった。一人一人が個々の視角から遠山先生の著作集を毎月一卷づつ書評し、それを『京浜歴史研究会報』に連載することを決め、連載を始めたのが翌九三年三月二十五日。それから約一年かかり、最終回は九四年四月二十五日となった。あらためて著者のかかわった世界の広さと深遠さに驚かされた。

著者の実践は、松田隆行・太湖賢一・伊東富昭が指摘するように維新史・天皇制研究において、きわめて方法的示唆に富む実証的研究をしている。そして、奥田和美が指摘するごとく、研究フィールドで実証した成果を絶えず、史学史上に位置づけさらに歴史像へと還元していく。その一方で現在及び未来の社会を形成する主体形成論へ、すなわち、奥田晴樹が詳細に跡づけたように、徹底した歴史教育論の展開となる。さらにはそれらをふまえて阪本宏児が跡づけたように、時々々の状況への積極的発言へと展開してゆく。まさに社会の全体性を問題にするゆえの方法的帰結であろう。

著者の研究は政治過程を扱ったものと思いを扱ったものとかかなり趣を異にしている。前者で示されている鋭い方法的な示唆は後者では一青山永久が指摘しているように、「自身の心の揺れを反映している」。福沢論における著者の知識人の役割論と歴史の主人公としての人民という評価基軸の矛盾は、著者の啓蒙主義との格闘の姿を表現したものではないだろうか。別の表現をすれば思想史には自身の著者の苦悩を見ることができると。

著者が第一巻の「はしがき」で、自らの五〇年余の研究生活をふりかえって、

唯物史観の「法則」「公式」は、マルクスの言葉を借りれば「私

の研究にとつての導きの糸として役だった一般的研究」であり、エンゲルスの言葉を借りれば「なによりもまず研究のさいの手引」であって、それ以上のものではない。しかしまた経済・政治・法律・教育・思想・宗教・芸術等々、歴史の諸要素を総体として統一的にとらえようとするならば、今日までのところもつとも有効な方法なのである。もとより唯物史観の立場に立てばそうした認識ができるというものでなく、未知なもの、疑問とするもの、解決不能な問題にぶつかり、見るべき成果をあげていないのが実情である。それにもかかわらず、唯物史観の見地に立とうとするかぎり、歴史を総合的・統一的にとらえようとする姿勢と努力が求められ、そのことが現象的に分裂・錯綜する今日の混迷激動の時期における歴史研究者の社会的責任の問題として、ますます重要さを増していることも、疑いないことである。

植山淳が指摘するように現在の歴史学の混迷は、研究者が「現代社会の持つ矛盾を描きだし、方向を示す」「歴史学の目的」を見失っていくところに根本的な要因が在るとすれば、戦後歴史学の終焉を言う者は、まさにこの点で、社会の全体性をとらえる見地を提示しなければならぬであろう。

我々の研究も「唯物史観の見地」に立つ、立たないは別問題にして、社会の全体性という見地を獲得することなしには、我々の原点——なぜ歴史を研究するのかを問う——を見失い、好事家集団化することだけは確かである。

(九四年九月記)

京浜歴史科学研究会代表 内田修道